

格差社会と私たちの未来

京都府・同志社女子高等学校 1年 高橋 佳奈子

以前、町で知らないお婆さんに話しかけられたことがある。信号待ちをしていた少しの間の出来事だったのだが、何とも頼りない感じで、キャリアを押しながら、それを支えにして歩いているといった感じのお婆さんだった。道でも尋ねられるのかと想像していたら、何とお金をくれないうのである。それは冬のことだったため、この寒さを耐えるために、パンと牛乳を買うお金を恵んでくれないうの。200円でいいからお願いしますとも言っていた。私より明らかに年上であるのに、私に対してやたら低姿勢だった。私は戸惑った。どうしたらよいのか分からなかった。

その日は一日中浮かない気持ちだった。あんなお婆さんに話しかけられたのは初めてで、世の中にそういう人がいることは知っていたので分かっているつもりになっていたが、本当のところはよく理解できていなかったのだと思う。あの時は結局、お婆さんがあまりにも不憫に感じられたので500円を渡してしまったのだが、後で友達に聞いた話では、いるところにはそういう人がたくさんいて、一人に渡してしまうとたくさんの方が集まって来て危ないからやめた方がよいとのことだった。私はその日一日中、どう対応すべきだったのかを考えた。いつの日かにホームレスの人たちを支援する、夜回りをしているという人から聞いた話を思い出した。冬の寒

さに耐えられるように毛布を配って回り、傷の手当てもしていると言っていた。その人たちなら、一体どういう対応をしたのだろうか。牧師さんだったらどうしたのだろうかとも考えた。普段神様の救いを説いている牧師さんなら、何か良い方法を知っているのだろうか。しばらく考えてみたが、答えは出なかった。今になってもまだ分からない。しかし、そもそもこの問いに確かな答えなどないのではないかと思う。

一体何があのお婆さんにあのようなことをさせているのか。私はあのお婆さんの消えて無くなってしまいそうな力のない声と、何か悲しげな眼が忘れられない。もしかしたらそれは、私の思い込みかもしれないし、勝手な先入観によって付け足されたものなのかもしれないが、それでも思い出すと必ずその雰囲気浮かんでくるのだ。日本国憲法の第25条にも「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と書いてあるのではないか。私はそれを、授業でさんざん習った。憲法にも書かれているのになぜあのお婆さんは、あのようなことをしなくては生きていけないのだろうか。国民全員が最低限度の生活を営むことができているのなら、お婆さんがあのようなことをする必要はなかっただろう。全員が幸せな生活を送れるわけではないのだから、私の言っていることはただの理想であり、現実には難しいのだと

いうことは分かっているが、それでも社会に対して理不尽な悔しさがこみ上げてくる。社会は多くの人間から成り立っているのだから、あのお婆さん一人だけを特別扱いすることは当然できない。私がたまたま話をしたのがあのお婆さんだけであって、本来ならあのお婆さんに限らず苦しい生活を送っている人はたくさんいるのだろう。それでも私の中ではあのお婆さんが、苦しい生活を送っている人たちの象徴のような存在になっている。

あの出来事から私は、社会に対する意識が少し変わった。少しでも意識していると、ホームレスらしき人というのが結構いることに気がついた。気に留めずに素通りしてしまったらそれでおしまいだが、私は意味もなくその人がなぜホームレスになってしまったのかを考えている。もちろん答えは出ないし、そんなことを考えているからといって何になるわけでもないのだが、テレビで取り上げている社会問題などは、まさにその答えなのではないかと思えるものがたくさんある。

最近、派遣社員についての話をよく耳にする。気になって父に尋ねてみたら、何と父の会社にも派遣社員がたくさんいるのだそうだ。昔に比べて大分増えたとも言っていた。どれくらい増えたのだろうかと思って調べてみると、総務省の「労働力調査」雇用形態別雇用者数という統計では、父が入社した1985年には派遣社員などの非正規雇用の人は全体の16.4%であったのに対し、2007年には33.5%にまで上昇していた。この数値には驚いた。これでは労働者の3人に1人が非正規雇用ということになる。徐々に上昇してきて

いるから、このまま上昇していったら私が就職する頃にはもっと上がっているだろうし、もし私は正社員になれたとしても私の子供の時代には、どうなっているのか想像もできない。それに、私が就職した会社が倒産してしまう可能性だってある。実際に正社員として勤めていた会社が倒産してしまい、とりあえずすぐに働ける派遣会社を選んだが、借金もしてしまい身動きがとれなくなってしまったという男性の新聞記事を見たことがある。悪循環だと思った。その男の人の人生もそうだが、今の社会の仕組み自体も、その様に思える。

もし一生派遣社員で正社員になれなかったとしたら、労働量の割に低い賃金で、老後の蓄えもほとんどできないだろう。年金も最近様々な問題があるため、あまり期待できない。そうなると働けなくなってから、苦しい生活を送ることになるかもしれないし、もしかしたらあのお婆さんようになってしまうかもしれない。

お金に対する意識も少し変わった。お婆さんは200円と言ったのだ。私はあの時から、200円というのがとても重みのある金額のように感じている。買い物をする時は、これは本当にいるものなのだろうかとよく考えてから買うようになった。それは当たり前のことであり、幼い頃からよく言われてきたことだが、いつの間にか意識が薄れてしまっていたように思う。

父に見せて貰った雑誌には、派遣社員の時給は1,000円～1,200円だと書いてあった。以前見た100円ショップのバイト募集の張り紙

に、時給 900 円と書かれていたことを思い出した。仮に 1,000 円であるとする、派遣社員の給料はバイトと 100 円しか変わらないことになる。100 円ショップの商品一つ分だ。時給 1,000 円では、1 日に 8 時間働くとしても、今は週休 2 日だから 1 ヶ月で働くのは 20 日程度であり、月給が 16 万円前後ということになる。そこから毎月の住宅費、ガス・光熱費等を引いたら 10 万円しか残らない。それでは結婚して家族を養うことは無理だろう。結婚できない人が増えれば、少子化もどんどん進んでいってしまう。今の社会には悪循環の連鎖がたくさん起こっていると思う。

企業からしたら派遣社員の方が安い労働力なわけだから、目先の利益を考えるとそちらをとってしまうのだろう。外国の安い製品も

出回っているから、それに対抗するためには仕方がないことなのかもしれない。しかし、例えば安い値段を追いかけるのではなく、日本の技術を用いた質の良い製品を目指していくなど、何かもっと良い方法を考えていくべきなのではないか。

私はまだ学生で、実際に社会に出ているわけでもなく、その厳しさも知らない。そんな私が安易な考えで口にするのは良くないことなのかもしれないが、それでも誰かがこの悪循環を断ち切らなくてはならないと思う。誰かがしてくれるだろうと思って待っていてもそれでは何も始まらない。一人一人がなんとかしなくてはならないという自発的な思いを持って、積極的に活動していくことが必要なのだと思う。